白い悪魔の使い魔？

つかちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白い悪魔の使い魔？

【Ｎコード】
Ｎ３４６４Ｗ

【作者名】
つかちー

【あらすじ】
俺の転生はアフターケアも何もない不親切な神様のせいで波乱万丈。
うっかりミスな容姿変更。ほとんど知らない転生先。持ち物もお金も無いし、身分証明どころか戸籍も無い。親はいないし帰る場所もない。
どうやって生きて行けと？

取り敢えず魔法でも使ってみる？

プロローグ（前書き）

勢いでやった。今のところ後悔も反省もしていない。

プロローグ

「貴方には転生して貰うことになりました」

何も無く真っ白な空間。いや、何も見えないというか視力が無いような感じがする。その上体動かすことも出来ず、その感触もない。

なんだ夢か。

「残念な事に夢ではありません」

こんな変な状態が夢以外のなんだってんだ。

「もう一度言います。貴方には転生して貰うことになりました」

転生？　……それは俺が――

「ええ、死にました。覚えていないんですね」

欠片もな。かなり信じられない。

「では、思い出させて上げましょうか？　おすすめはしませんが」

……比喩的に言うと？

「柘榴――」

もうそれ以上聞きません。

「もし思い出したら廃人になってしまうかもしれませんしね」

それで転生……なぜ俺が？

「その質問にはお答えできません」

……理由は？

「同じくお答えできません」

転生先は？

「以下同文」

拒否は？

「許されません」

横暴かよ。

「横暴です」

自覚もあるのか。

「嫌がる理由は無いでしょう？」

怪しさ１００％で喜べと？

「まあ、貴方に理由があるように私たちにも理由があります。です

から取引をしましょう。」

……どんな取引だ？

「貴方に転生して貰うのは確定です。もう変更はありません。その代わり、貴方の願いを１つだけ叶えましょう」

どんな願いでも？

「常識の範囲内でお願いします。願える回数を増やすとかじゃなければ問題は無いと思いますが」

俺が生き返るのは……転生が確定してるので無理。

両親は……心配だが、一番心配なのは自身の未来か。

行き先を選んで……「それは駄目です」駄目なのか。そもそも俺が一般人のままじゃなんの意味も無いな。

能力……どんな世界かも分からないのに選べって言われてもな……。

うーん。

「まだなんですか？」

悪いな、時間があるなら思いっきり悩むタイプなんだ。逆に即決の時には1秒もいらない。けど、決まったぞ。

「なんですか？」

あれだ、ＢＬＡＫＣ　ＣＡＴのイヴみたいになりたい。あの能力の自由度かなり高いし。

「わかりました。じゃあ早速転生して貰います」

早ッ！

「貴方が時間使いすぎたからです。トータルで見れば遅いんですよ？」

わかった、わかった。……最後に質問してもいいか？

「ええ、これが本当に最後ですからね」

お前たちは一体何だ？

「さぁ？」

……

「ただ、人は私たちのことを神様と呼んだりするらしいですよ？」

そうかい。俺は神様なんて信じてないけどな。

真っ白に感じていた辺が徐々に暗く色づく。そして真っ暗になるのと同じように体の感覚を感じ始めた。

地面に立つ足の感覚。服を着た体の感覚。そして、体を叩く雨を感じる。体全身が雨に晒され、濡れてない箇所がないくらいだ。

「なんで？」

いきなり大雨なんだよ。そう苛立ちを感じつつ、その自分のらしからぬ声に戸惑う。

今まで固く閉じられていた目蓋を開けると、懐かしく感じられる光が目に飛び込んできて視界が広がった。

肌で感じたとおり大雨が降ってる。そしてなぜか公園のど真ん中に立っているらしい。

確かに大雨の公園なんて誰もいないから人が突然現れても問題ないのかもしれないが……

「扱いが酷すぎる」

もう二度と会いたくないものだ。

このまま突っ立っていても仕方ないので公園を出ることにした。早くどんな世界なのか調べないと不味いと思ったからだ。

大雨の街を1人歩く。もうこれ以上は濡れ様がないので雨も気にしない、お店には迷惑だろうから入らない。

しかし、街の探索を初めて直ぐに違和感に気づいた。

歩きにくい。そして雨で濡れた長髪が張り付いて気持ち悪い。ん、長髪？

俺の髪型は別にロン毛では無かった。そう疑問に思って手に取って初めて気づいた。

それは腰に届くほどのストレートな金髪――

まさかと思い近くのショーウインドウに駆け寄る。鏡ではないのではっきりとはわからないが疑問を解消するには十分だった。

「イヴ……？」

推定身長１３０ｃｍ。真っ黒な服を着ている金髪の女の子。

恐らくイヴ。

大体イブ。

Ｔｈｅイヴ。

そして、今の俺の姿。

「俺はあの時――」

――あれだ、ＢＬＡＫＣ　ＣＡＴのイヴみたいになりたい。

「姿まで変えなくて良かったのに……」

歩きにくいのも当然だ。身長が何十センチも変わってるんだから当然歩幅も違う。

どうすんだよ……これ。

「よし、決めた。どうもしない」

と言うかどうしようも無い。少なくとも今は。しかし、イヴの変身(トランス)能力を使えば……。

「イッッ……」

突然の頭痛。そんなに大したことはないが……。

そうだ、そんなことより探索を続けないと。

探索を初めてどれだけの時間がたったのか、時計も持っていないので分かりようもない。ついでに現在の時刻も分からない。

歩けど歩けど風景は変わらず平凡な町並み。なんの変哲も無い。

わざわざ転生したのだから何かしらあると確信していたのだが、その確信も揺らぎつつある。どこにでもありそうな町で、自分の記憶にあるような地名でもなさそうだ。

それに、さっきから頭痛が止まらない。酷く疲れた。

「……ん？」

ボンヤリと歪み始めた視界で不思議と目に止まった店が合った。

「翠……屋？　喫茶店かな？」

その店の入口から女性が出てくるのが見えた気がしたが、それと同時に意識が落ちた。

プロローグ（後書き）

更新予定は未定。

捨てる神あれば拾う神あり（前書き）

私はあまり原作に詳しくありません。
なので、いたらない部分もあるかもしれませんがよろしくお願いします。

捨てる神あれば拾う神あり

柔らかく暖かな布団の中で目を覚ました。全く見知らぬ場所に寝ていたというのに焦る気持ちが湧かない。

頭はまだボンヤリとしていたが気を失う前に感じていた頭痛は消えていた。

「あら、起きたのね。もう体は大丈夫かしら？」

声をかけてきたのは女性。雰囲気の柔らかさから３０代位だろうか？

「ええっと、あなたは……」

「私は高町桃子よ。それであなたは？　どうして大雨の中にいたの？」

どうしてって言われても……なんて答えたらいいんだ？

「……わかりません」

「わからないってもしかして……。記憶喪失とかかしら？」

記憶喪失……それだッ！

多少怪しくてもこの際仕方ない。うまく演技しなくては。

「多分……」

「それじゃあ、名前も覚えてないの？」

名前。名前って言ったら……。

「イヴ……」

「イブ……キ？」

「そ、そう。イブキ！」

イブキ、漢字はどの漢字だろうか？　アルファベットなら『ＥＶＥＫＩ』？

「記憶喪失……これは困ったわね」

「な、何がですか？」

「あなたの服もビショ濡れだったから洗濯したのだけど、なーんにも持ってなかったのよね」

言われて気づいたが今着ているのは妙にファンシーなパジャマのようだ。何も持っていなかったのは当然というか……。

「だから、あなたがどこの子かわからないのよ」

あーそっか、そもそも親は居ないだろうし、そもそも戸籍があるのかも疑わしい。

「すいません。迷惑をかけてしまって」

「あらあら、礼儀正しいのね。でもそんなに固くならなくてもいいのよ？　子供なんだから」

そう言えばそうなるのかな？　まあ、その方が楽そうだし、記憶喪失と矛盾するようなことは何も言えないしな。

「そうねぇ。イブキちゃんはいい子だし、親が見つかるまで家にいていいわよ？」

嘘！？　いいのだろうか、正直願ってもない話だ。今の俺には他に行くところはないのだから。

「あ、ありがとうございます！」

「いいのよ、イブキちゃん可愛いし」

それはちょっと複雑な心境だ。イヴが可愛いのは認めるが。

その後、家の事について軽い説明を受けた。ご主人であり、この喫茶店『翠屋』の店主でもある士郎さんも快く引き受けてくれて、その優しさに少し涙が出た。

後、トイレに行ったときに鏡を見て気づいたのだが髪の色が黒曜石のような黒色に変わっていた。ついでに瞳の色は赤紫。

桃子さんに聞いて見ると、倒れた俺に駆け寄ったとき金から黒に変わったように見えたらしい。でも気のせいだと思ったようだ。どこか抜けている気もするが、変に怪しまれても困るので結果オーライだ。

子供たちは今学校に行っているので夕食前に紹介してくれるらしい。そのための着替えも用意してもらって、何から何までお世話になっている……。

この恩は絶対忘れないと心に誓った。

捨てる神あれば拾う神あり（後書き）

作中では誰も解説できない部分を少々。

髪の色が変わったのは精神と肉体のギャップによる違和感（気を失う原因）をアジャストしたからです。主に肉体に精神が引っ張られた形になります。これによって身長差の違和感も消えました。

というのは建前で、フェイトと金髪が被らないようにする必要があったのでこのような形になりました。

ついでに名前はなんとなくです。ぱっと浮かんできたので、そのまま採用しました。

賑やかな家族（前書き）

原作知識が乏しいのでキャラの性格や口調いまいち分かりません。
間違っているところがあれば教えてもらえると助かります。

賑やかな家族

「という訳で、この子を家で預かることにしました」

高町家の子供は3人。
高町恭也、大学一年生。
高町美由希、高校二年生。
高町なのは、小学校三年生。

自己紹介をして、それぞれ三者三様に驚いているようだ。それも当然だとは思うけどな。

それにしても高町なのは……。今の自分よりも少し小さい彼女が何となく気になる。

どこかで見たことがあるような、ないような。

「……みんな、いいかしら？」

「あ、ああ。父さんたちがいいなら」

「私も……」

「あれ、今着てるのって私の服？」

概ね同意が得られたところで現状を確認しておこう。

時間は夕食前。

場所は高町家のリビング。

高町さん5人と俺の計6人がいる。

そして俺が今着ているのは高町なのは（少女）の服。桃子さんに着るように言われたものだ。

つまり女の子用の服、しかもスカートである。

「イブキちゃんの服は雨で濡れちゃったからね」

俺と高町なのはの身長はほぼ同じくらい。さっきまで着ていたパジャマも彼女のものだろうか？

「えっと、ごめんなさい。なのは……さん」

なんて呼ぶべきかは非常に悩むところである。明らかに年上ならそれ相応の対応があるけど見た目上同い年だからな。

「あ、ううん。全然いいんだよ。……イブキちゃんだよね。私のこともなのはでいいから」

どうやらなのはは社交的な性格をしているらしく、積極的にこちらに歩み寄ろうとしてくれている。ここは厚意に甘えておくところだ。

「うん。……なのは」

とはいえ相手は女の子。多少むず痒く感じるな。

「ねぇ、お母さん。この子は私の妹ってことになるのかしら？」

「ふふふっ。さあ、どうかしらね？」

美由希さんと桃子さんの不穏な会話。しかも桃子さんの目がその判断は俺にあると告げている。美由希さんと目が合う。その瞳は期待に満ち溢れていたが……。

「それはできません」

「ええっ。なんで！？」

とても残念な表情を浮かべた美由希さんと相変わらずうふふと笑う桃子さんの顔が見える。そうか、桃子さんはずぶ濡れの俺を着替えさせていたから知っていて当然。

「だって俺は男だから……」

「「えええええ！？」」

なのはと美由希さんの驚きの声が被る。桃子さんは分かった上で俺にこの服を着せたのか……。

まさかの弟キターーー！　とさっきよりも大きなリアクションを取る美由希さん。

予想外の事態に混乱し、ポカンとした顔のなのは。

「ちょっと……。それは聞いてないんだが」

そして僅かに殺気立つ男性2人。とても目が怖い。

この後開かれた家族会議にて賛成3、反対2で俺の居候は許可された。

なぜか条件として剣の稽古をすることが加わっていたが、俺の拒否できる雰囲気でもなかったのでおとなしく言うことを聞くことにする。

こんな状況で言うのは場違いかもしれないが、平穏な日々が訪れるのはまだまだ先のことになりそうだ。

賑やかな家族（後書き）

作中では知る方法もなかったことですが、転生時の体は女性でした。

前回のアジャストで髪の色が変わったときにその辺も変化していました。

本来なら肉体に精神が引っ張られて違和感が無くなる程度だったのですが、イヴの体は『トランス』が可能なので精神に合わせて肉体が変化したということです。

今後も不定期の更新になります（ノリと勢いで書いてるので）

コメントがあったらそれを励みに更新されるかもしれませんね。

私はお調子者なので。

追伸。ＰＶってどれくらいからすごいのか分かりません。

誰か教えてくれませんかね？

平穏な日常（前書き）

取り敢えずここまでは前置き。
次から原作開始です。

平穏な日常

高町家で居候を始めて数日。現状について少しまとめておこう。

まず、病院に行ったり警察に行ったりした。

体には異常が無かった。しかし、俺の今の体は確かにイヴの……ナノマシン生体兵器なのだが、そのことは検査に引っかかったりしなくて本当によかったと思う。もしかしたらモルモット扱いされる未来もあったかもしれない。

後、警察に行ったのは行方不明届けが出ていないかを確認しに行った。もちろん出ているはずも無く……。

かくして、正式な手続きを踏んだ後、俺は高町家にお世話になっていた。

今は学校に行くかどうかは保留になっている。色々手続きとかがあるのだろう。

代わりに昼間は翠屋のお手伝いをしている。料理はしていないが、そのうち教わろうと考えている。感謝の気持ちは出来るだけ行動で示したい。

後は桃子さんと美由希さんに着せ替え人形の如く遊ばれていたりする。

今の日常はこんな感じだ。

それ以外の日常でない部分が俺にとって非常に重要な部分である。

それはズバリ自分の体について。

正確にいえばこの体が持つ変身(トランス)能力についてだ。これはかなり期待していたのだが、大きな問題があった。

どうすれば変身(トランス)出来るのかが分からないのだ。

さっぱり手掛かりが掴めない中でも毎日鏡と向き合ってイメージしていた結果。髪と目の色を変えることには成功した。

しかし、それが限界だった。

イメージが大切なのは確かだが、自分の体の形が変わるのは想像もできない。

目の色を変えてギアスごっこでもしたい気分だが、分かってくれる人は誰もいない。虚しくなるだけだった。

そもそもこんな能力がこの普通で平和な世界で何の役に立つのかと疑問に思い始めた平日の昼下がりだった。

平穏な日常（後書き）

ちなみに現在肉体と精神がリンクしていて、今の（男の娘ｖｅｒイヴ）の体がデフォルメになっています。
変身（トランス）が解けるときは自動的に（今回は髪と目の色が）今の体に戻ります。

変な夢は何かの知らせ？（前書き）

何となくなのは視点で一話を再現。
どうだったでしょうか？

変な夢は何かの知らせ？

その日はなんだか変な夢を見ました。

私は普段から朝に弱く、今朝も携帯電話のアラームに叩き起こされたので、ついさっきまで見ていた夢もぼんやりとしか思い出せません。

私、高町なのははこの高町家における3人兄妹の末っ子さんでした。

でしたと言うのも、つい二週間程前に高町家に新しい家族が増えたからです。

「おはよー」

「あ、なのは。おはよう」

この人は私のお母さんの高町桃子さん。お菓子職人でなのはの大好きなお母さんです。

「おはよう、なのは。ちゃんと一人で起きられたなぁ。偉いぞ」

こちらはお父さんの高町士郎さん。駅前の喫茶店『翠屋』のマスターで、一家の大黒柱さん。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

「ああ、道場に居るんじゃないかな？　イブキ君と一緒に」

「お兄ちゃんお姉ちゃん、イブキ君おはよー。朝ごはんだよ」

みんなは家の庭にある立派な道場にいました。今日も朝から稽古に励んでいたようです。

「おはよう」

「あ、なのはおはよう」

「ん、おはよう」

「はい、これ」

私は稽古で汗をかいたお姉ちゃんにタオルを投げます。

「ありがと」

ここにいる3人が私の兄妹です。

「じゃあ、美由希。今朝はここまで」

お兄ちゃんの高町恭也さんは大学1年生。お父さん直伝の剣術家でお姉ちゃんのお師匠さんなの。

「はい。じゃあ、続きは学校から帰ってからね」

で、お姉ちゃんの高町美由希さんは高校2年生。

「あそこで切り返して……」

それから、正座して考え込んでいるのがイブキ君。どうやら今朝の稽古を思い返しているみたい。

イブキ君は最近出来た新しい家族。記憶喪失だから私より年上なのか年下なのかよくわからないの。身長はほとんど同じだから同い年ってことになってる。

イブキ君は長くて綺麗な黒髪と整った顔立ちで見た目は完全に女の子だけど正真正銘男の子。特に、最近見せてくれるようになった笑顔は男の子のものだ。（それでも男の子っぽい女の子にしか見えないけど）

「ん～今朝も美味しいなぁ。特にこの――」

「本当～？　トッピングのトマトとチーズと――」

「みんなあれだぞ、こんなに料理上手なお母さんを持って幸せなん

だから、分かってんのか？」

「もうやだぁ、アナタったらぁ」

高町家の両親は未だ新婚気分バリバリです。

「美由希、リボンが曲がっている」

「え、本当？」

「どら、貸してみろ」

で、お兄ちゃんとお姉ちゃんもとっても仲良しで、愛されてる自覚はとってもありますが、この一家の中でなのははビミョーに浮いているかもしれません。

「ん、なのはどうした？」

気づけば私はこの食卓で朝ごはんに夢中になっていたイブキ君を見つめていました。

イブキ君も家に来てしばらくは遠慮して食べていたみたいですが、一度空腹で倒れたとかで今はもう思いっきり食べています。その様子を見るお母さんは嬉しそうですが、私と同じくらいの体のどこにあの食べ物が入っていくのか気になるところです。私の軽く3倍は食べているんじゃないでしょうか。

「もしかして変な夢でもみたのか？」

「あれ、どーして分かったの？」

「……俺も変な夢を見たような気がして。もう忘れたけど」

「もしかしたら同じような夢だったのかな？」

「どうだろうな」

イブキ君と出会ってまだ少ししか経ってないけど、話しやすくてとってもいい人だなって思ってます。

私は今から学校。イブキ君も一緒に学校に行けたらいいのだけれど、今はまだ無理なんだとか。友達のアリサちゃんもすずかちゃんも、イブキ君のことを話したら会ってみたいと言っていました。実際に会ってみればみんな仲良くなれると思っています。

変な夢は何かの知らせ？（後書き）

ちなみに原作イヴは（実年齢は不明だが一応）１１歳で身長が１４４ｃｍありますが、原作介入しやすくするために同い年の８歳で身長１３５ｃｍくらいになっています。
（なのはの身長は公式発表されていないが１３３ｃｍくらいと思われる）
大飯喰らい設定は『変身能力（トランス）ってエネルギーの消費激しそう』と言う想像から来ています。
ついでにイヴは左利きらしいのですが主人公は右利きだったので合わせて両利きにしてみます。器用になっただけで特に意味は無いです。

以上、作中では解説できる人物がいないので解説してみようコーナーでした。
今後恒例のコーナーになるかもしれません。もしくはコメントされた質問はここで答えるようにするのも有りかもしれませんね。

という訳でコメントや質問等お待ちしております。

これってもしかしてニートですか？（前書き）

少し書き方が変わったと思います。読みにくかったらすいません。内容は未だ日常を抜け出せずにいます。時間は1話のAパートくらいになりますが。

これってもしかしてニートですか？

「いってきまーす」

「おう、気を付けてなー」

学校に行くなのはを見送った俺はしばらく暇になってしまう。
他の高町家の面々もそれぞれ出かけていくのだが俺は道場に残っている。

今朝見た稽古を思い返しながら木刀を振るう。

朝の時間は恭也さんと美由希さんにとって貴重なので、見るだけで邪魔をしない。
その代わり、集中して見ているのでしっかりと記憶できる。
見て覚えた事はこの８時から１０時位の間で実際に体を動かしながら復習するのだ。

特筆すべきはこの体の身体能力の高さである。
１０歳に満たない体でありながら、恐らくアスリートレベルの動きができる。これを見られる訳にはいかないので、全力を出して稽古できるのは１人きりのときに限定される。
その結果、（何故か）この高町家に伝わっている『小太刀二刀御神流』を教わっていると言っても、ほとんど我流と言っても過言ではない。
時間にして２時間程で１日の稽古は終わる。特に筋トレの必要がないのはチート臭いよな。

シャワーを浴びてさっぱりした後（桃子さんが）用意した服を着て家を出る。
もちろん渡された合鍵で戸締まりもきっちりとする。
行き先は駅前の喫茶店『翠屋』だ。

「あら、今日は早かったのね」

出迎えてくれたのは桃子さんだった。
昼には少し早い時間帯。この後、昼から昼過ぎにかけて忙しい時間帯になる。その手伝いも俺の日課だ。

そうやって店を手伝うためにやたらと可愛らしい服を桃子さんに着せられるのも俺の仕事だった。

「今日の服は動きにくくない？」

今日のはいわゆるゴスロリと言う奴だろうか？　しかも黒ならまだ救いようがあるが、白にピンクとかは本当に止めて欲しい。

「あら、可愛くていいじゃない。とっても似合っているわよ」

もしかしたらそれが一番の問題かもしれない。自分でも鏡を見ていて違和感を感じなくなってきたのだ。

桃子さん……いや、もういいや。桃子は俺の葛藤を分かってはくれない。しかし、逆らえないでいる俺にも問題があるのだろうか？

結局今日も何も言えず店のお手伝い。
普通に考えて小学生位の俺がここにいるのはおかしいのではないかと思うのだが、そのことを聞いてくるお客さんはいない。一体どういう認識をされているのやら……。

ウエイトレスをしたり、お客さんに愛でられたり、お客さんと同じテーブルでお昼を食べたりと、妙に疲れるお手伝いは3時前に終わる。
実はその後、学校が終わる時間に合わせて忙しい時間帯になるのだが、その前に避難することにしている。
女子中学生や女子高生の相手は近所の奥様方の数倍疲れるからだ。

家に帰ってからはすることもなく暇な時間だ。
家事の手伝いということで掃除でもしてみようかと思ったが家の中はとても綺麗で、手のつけようが無かった。

そんな時間を持て余すのは勿体無いので変身能力（トランス）の練習をしているつもりなのだが、成果は無く虚しさが募るばかりだ。
明日からは近所の散策でもしてみようかと思う。

うっかり忘れかけていたが俺は転生したのだった。ここが本当に何も無い平和な世界なのか証明する手立てはないが、できる限りの事はしてみたい。じっとしているのは性分ではないのだ。

これってもしかしてニートですか？（後書き）

さん付けが面倒になってきた……。

平凡な家庭に剣術が伝わっているのはかなり変ですよね。しかもストーリーには関係なく。

この小説を書くにあたって始めてその理由を知りました。

そして次回ようやくユーノ君が登場！

油断が招いた事態（前書き）

ノリと勢いで書いているので不安定ですね。
もう少し計画性が持てるようになりたいです。

油断が招いた事態

夕食前、一家団欒、家族（居候を含む）全員が揃った時のことだ。

なのはが怪我をしたフェレットを拾ったから家で預かりたいと言い出したのだ。

「なのはがちゃんとお世話出来るならいいかも」

普段からいい子なのはだから簡単に許しがもらえる。日頃の行いがいいからだし、ペットを飼うのも貴重な経験と言える。いい行いがいい結果に繋がる事を改めて感じた。

「なのはが学校に行ってる間は俺が面倒見てるよ」

それはほんの気まぐれのようなもので、なのはの善行に感化されてか思わず口に出していた。

「本当？　ありがとうなの！」

俺の言葉を聞いて満面の笑みを浮かべるなのはを見て、やっぱり辞めるとは言えない。まあ、昼間は暇なんだしそれくらいやることがあってもいいと思える。動物だって嫌いじゃないしな。

その夜のことだった。

なのはが家からこっそり出ていったのだ。
まだ、初めて会ってから2週間位しか経っていないけど、なのはのことは割と分かっているつもりだ。少なくとも高町家の他の人たちよりも肉体年齢が近い分打ち解けている方だ。
なのはがいいことをするところは簡単に想像できるが悪いことをするとは思えない。

止めるべきかどうか悩んだけど、止めずに後を付けることにした。それは何かを予感したわけでもなく、なんとなくでしかないが何か理由があるはずだと感じた気がした。
その理由はなのはに取って夜に行かなければならないほど大事なことなのだろう。
もし、危なければ助けに入ればいい。

何より、この世界で始めて起きた事件と言ってもいい。

小さな事だが……

と、そう思っていられたのはその時までだった。

肝心の理由を隠されたのでは意味がないので、コッソリと後を追う。
かなり急いでいて周りへの注意は疎かなので、尾行がバレることも無かった。

たどり着いたのは……動物病院？

今日言っていたフェレットがいるところだろうか。しかし、わざわざ夜の、閉まっているここに来る必要はなんなのだろうか？

「っ！？」

変な音と自分の体の中を何かが通り抜けるような気味が悪い感覚。

「また、この音……！」

なのはは耳を押さえてそう言った。

これが理由なのか？

なぜかはわからないが、普通の住宅街なのに、いつもと違う世界にいる感覚。低く唸るような獣の声。

何かがおかしい。

何がおかしいのか分からず硬直した俺を置いてなのはが動物病院の敷地に踏み込む。

そして、塀の向こう側から聞こえてくる破砕音。

「なのはっ！！」

危ないことは無いと思っていた。

平和な世界で。

平穏な日常で。

幸せな家族で。

楽観していたんだ。
だから、今回もなのはを止めずに付いてきた。
なのはを守らないといけない。
そう言う気持ちが俺の足を動かした。

そこに居たのはしゃべるフェレットと黒い何かだった。
黒くて、うねうねしてて、生き物っぽいけど絶対生き物じゃない何かがそこに居た。

「しゃべったぁ！」

「いや、なのは。それは後でいいから早く逃げるぞ！」

「って、なんでイブキ君がいるのぉ！？」

「それも後でいいから！」

……守ると言っても、今の俺にはなのはを連れて逃げるしかできることは無かった。

油断が招いた事態（後書き）

いくら身体能力が高くても相手が得体の知れないものだったら逃げますよねぇ。

コメント、指摘、質問待ってます。

つかちーでしたっ。

魔法少女？（前書き）

後半うまく書けなかった……
というか、グダグダするのは毎回でしょうか？

魔法少女？

「何が何だかよく分かんないけど、一体何なの？　何が起きてるの！？」

謎の獣から逃げるために夜の町を走り抜ける。
もちろん速度はなのはに合わせている。本当ならなのはを抱えて走るのが一番早いが、そこまでは出来ない。

「取り敢えず説明してくれッ！」

「僕はある捜し物の為にここでは無い世界から来ました……」

話が長い！　今はあの化け物の説明だけでよかったのに！

―ユーノ君の説明中―

「まとめると？」

「僕と契約し……もとい、僕に力を貸して！」

なるほど話は分かった。

いやよく理解できてはいないけど、資質のある君に魔法の力を使って助けて欲しいと。

「それで、俺となのはのどっちがやればいいんだ？」

「え！？　イブキ君、今の話を信じたの！？　魔法だよ！」

「下手すれば命の危機だぞ？　もう既に巻き込まれてるんだ。今更戸惑っても仕方がない」

これでも諦めの良さには定評が……あった。昔の話だけどな。

――うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん

唸り声を上げて化け物は落ちてきた。追ってきているのは分かってたけど、まさか空を飛んでくるとはな。

アスファルトを砕いた化け物はウネウネと……形を再生しているのだろうか？

「資質があるのは……君の方だ！」

そう言ってフェレットが指すのはなのは。

ん？　なのは……魔法……少女？

「でも、どうすればいいの……？」

「これを！」

それはフェレットが身に付けていた赤い宝石のような物。今はほんのりと輝いている。

うるるぅぅぅる……！！

不味い、もう化け物の体が元通りに！

「復唱して、我、使命を受けし者なり――」

「わ、我、使命を受けし者なり――」

なのは達はなのは達でどうしようもない。変身のための口上のようだが無防備極まりない。

この場で動けるのは俺だけ。

なのはを守らなければならない。

しかし、相手はアスファルトすら叩き割る化け物。

方法があるとすればたった1つ――

うがるうぅぅぅぅぅうっ！

「風は空に、星は天に――」

「風は空に、星は天に――」

「すぅ……はぁ」

深呼吸を1つ。

大丈夫だできる。なのはを守るんだ。

がぁぁぁぁあああ！！

獣が咆哮を上げ、こちらに飛びかかってくる。

物理法則を無視し、自身の肉体へのダメージすら気にすることのない突撃だ。冷静になればその攻撃の異常さがよくわかる。

そのすてみタックル（仮称）に対し、俺が思うのはシンプルな一文のみ。

――なのはは守る。

両腕を突き出してイメージする。守るためのイメージを。

「変身（トランス）能力！！　【シールド】！！」

がぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！

「「この手に魔法を。レイジングハート、セット・アップ！」」

『ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ．』

俺と化け物の激突。そしてなのはの手の宝石が光り輝いたのは、ほぼ同時だった。

魔法少女？（後書き）

あるぇー。
なんかイメージしてたのと違う……？

今後も細々と続けていきます。

追記、ユニークが３０００を超えてました。
すごいんでしょうか？　あまり詳しくないので誰か教えてください。

リリカル（前書き）

なかなか進まないですね。
この２話の辺が終わってからはかなり加速するんじゃないでしょうか？

リリカル

「と、取り敢えずこれで！」

化け物との激突して弾き飛ばされた俺は、コンクリートブロックに叩きつけられて一瞬気を失ってしまったようだ。

目をつぶっていた俺の瞼の上を光が差す。その強すぎる輝きに目を開けることも叶わない。

手を使って光を遮ろうとして、両手がくっついたかのように動かないのに気づく。

「なんなの……これ？」

光が収まり、なのはの声が聞こえた。

早く状況を確認するため無理やり目を開く。

そこで見たのはさっきと違う格好をしたなのはだった。

今まで着ていたなのはのお気に入りらしい私服から、なのはの通う学校の制服を改造（カスタマイズ）したような服に変わっている。そしてその手には機械っぽい杖。

その姿はまるで魔法少女……。

ぐおぉぉぉぉぉ……！！

俺の思考を遮ったのはウネウネの化け物。まずあいつをどうにかしないと呑気に考えている暇はない。

「えぇ、これなにー！？」

なのはは突然起こった様々な事を処理しきれてないらしい。そしてそれは俺にだって言えることだった。

「変身（トランス）できた……！」

俺の両腕は前に突き出されたまま、その先が円形状の簡素な盾に変身（トランス）していた。

「あ、消えた……」

俺が自分の手が手ではなくなっていると言う状況に違和感を感じた瞬間元に戻っていた。

単純な話、イメージが大事なんだろう。

「来ます！」

フェレットの声で我に帰る。考察は後でゆっくりやればいい。今は文字通りなのはを守る事を考えるんだ！

なのはに飛びかかる化け物との間に無理やり割って入る。

「変身（トランス）能力【シールド】！！」

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

二度目の衝突。さっきのように弾かれないのはなのはが使ったらしい魔法のおかげか。

光る壁に阻まれたウネウネが辺りに飛び散って悲惨な情景を作る。道も塀もボロボロじゃないか。

バラバラになった化け物は再び元の形へと戻ろうと蠢いている。しばらくは時間が稼げそうだ。

「一旦逃げるぞ！　後、どうやればアレを倒せるのか教えろ！！」

「あれは――

（以下略）

「要するに感覚次第ってことか……。本当に魔法なのか、それ？」

「そんなこと言ってる場合じゃないです！」

それもそうだが……なんか納得いかねぇ。後で詳しい話を聞かせてもらうとしよう。

「じゃあ、なのはの魔法で封印するしか手段はないんだな？」

もしくは再生の様子はまるで魔〇ブウみたいだったから、膨大なエネルギーで塵も残さず消し飛ばすとかな。

「えぇ～～！？　私魔法なんて使えないよ～」

「いえ、なのはさんの資質ならできます！」

断言するフェレット。そんなにすごいのだろうか？

「なんにしても、他に方法がないんじゃやるしかない。俺が足止めするからその間になんとかしてくれ」

「そんな！　危ないよ！？」

「だったら早く封印してくれよ。くるぞ！」

追ってきた化け物に立ち向かう。俺にできるのは足止めだけと割り切って手の盾を使って防御に徹する。

「リリカルマジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器。
ジュエルシード！」

フェレットの声になのはが続く。

「ジュエルシードを封印。」

「ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．ｓｅｔ　ｕｐ．ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ」

変形したのか、杖の先の方から光の翼のようなものが３つ突き出す。

今更だが、あの杖喋ってるのか？

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル２１。封印！！」

「ｓｅａｌｉｎｇ．ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＸＩ．」

光の帯びが化け物を捉え、光と共に消滅する。これで終わり……か？

その後、俺たちは騒動の原因であるジュエルシードと、気を失ったフェレットを回収してその場から逃げ出した。

なにせ辺り一面ボロボロになっているところに留まっていては警察とかに捕まってしまう。ただでさえ夜出歩いているだけで危ないのだ。

そして俺たちは人気の少ない公園に逃げ込んだ。

疲れてはいても怪我のないなのははいいが俺はそうもいかない。打った背中も盾を構え続けた両腕も痛む。何より精神的に辛い。

ベンチに座って休んでいると、フェレットは目を覚ました。

「すみません」

「あ、起こしちゃった？　ごめんね乱暴で。怪我は痛くない？」

「怪我は平気です。魔法でほとんど治っているから」

そう言って見せられた包帯の下は怪我の後が少しあるくらいだった。なのはによれば昼間はもっと怪我が酷かったらしい。

ついでに俺の傷も治して欲しい。

「ねぇ、自己紹介していい？　私、高町なのは、小学校3年生。家族とか、仲良しの友達はなのはって呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名

前です」

「ユーノ君か、可愛い名前だね」

へぇ、フェレットなのに立派な名前があるんだな。それにスクライアと言う部族か……。フェレット大家族、みたいなものだろうか？

しゃべれる上に相当な知力があるし、動物やペットとしてじゃなくて対等に見てやるのが礼儀ってやつだな。

「俺はイブキな」

苗字も何もないので俺の自己紹介は簡潔。なにか考えて置くべきだろうか……。

「すいません。あなた達を巻き込んでしまって……。」

「えっと、多分、私平気。イブキ君もいるしね。そうだ、ユーノ君もイブキくんも怪我してるんだしここじゃ落ち着かないよね。取り敢えず私の家に行きましょう。後の事はそれから、ね。」

後の事か、俺のことはどう説明しよう……。変身能力（トランス）とかは……あれ、そもそも記憶喪失扱いになってるから説明できない？

リリカル（後書き）

わーお。恭也さんが怖い。
それだけ妹を大事に思っているんですよね。
こんないいキャラの出番が最初しかないのは残念に思います。
自分はトラハをしたことがないので若干興味が湧いてきた今日この頃。

今更気づいた事実（前書き）

不定期更新中。
時間が取れません。

今更気づいた事実

高町家に帰ってきた俺たちを待っていたのは恭也さんと美由希さんだった。
見つかった瞬間それなりの御仕置きを覚悟した。しかし、怒られはしたものの美由希さんがユーノに気づいた事によってうやむやになった。
二度目は無いと思っておこう。

その後は、肉体精神共々疲れ切っていたので早々に眠りに付いてしまった。

次の日。

なのははいつも通り学校へ行き、俺は喫茶翠屋へ。
午前中はユーノがなのはに念話（テレパシーみたいな魔法）で詳しい事情を説明していた。

なのはは本格的にユーノに協力したいらしい。本当にいい子だ。

ちなみに俺も聞くことだけならできるが送信は不可。これを含めて聞きたいことは山ほどあったが、昼過ぎまで持ち越された。

そして昼過ぎ。いつもより早めに翠屋を出てユーノが待つ高町家へと戻る。

「いきなりで悪いんだけど質問していいか？」

「うん、いいよ」

「一昨日の夜、俺もなのはと同じ夢を見たらしいんだ。だったら俺にも魔法の資質があるってことなのか？」

なのははっきり聞き取れたらしいユーノからのＳＯＳ。俺には虫の知らせ程度にしか感じることは出来なかった。

「はい、なのは程じゃないけど資質があります」

「じゃあ昨日、ユーノの念話が聞き取れなかったのは？」

「それは僕が弱っていたから弱い念話しかできなくて……。なのはその微弱な魔力も感知出来たみたいだけど」

「……俺の資質って大したことないの？」

「いえ、なのはがずば抜けてすごいだけで……。ランクにするとＢ位かな？」

「ランクとか言われてもねぇ」

「Ｂなら『優秀』って所だね。なのはＡ以上は間違いないと思う。下手したらＡＡかも」

成程、才能の差か。別に悔しくなんてない。力は使い方次第だし、俺には変身能力(トランス)もある。

「とりあえずこれで最後だ。俺も魔法を使えるのか？」

「く、訓練さえすれば」

俺の真剣な眼差しに気圧されてかユーノが一歩後ずさる。

「具体的にどんな訓練だ？」

「えっと……。僕は教えるは専門じゃないからなんとも」

「資質があれば誰でも使えるんじゃないのか？　現になのはは使ってるし」

「確かにインテリジェントデバイスのサポートがあれば初心者でも使えるけど、今はレイジングハート以外にデバイスは無いから」

「じゃあ、なのはに借りれば……！」

「レイジングハートは気難しくて……。もうなのはをマスターに選んだから多分無理」

「他に方法は……！」

「そんなこと言っても、術式自体は教えることが出来ても、魔力の扱い方は人それぞれだからインテリジェントデバイスを使うか専用の魔法を使うぐらいしか……」

「じゃあ、つまり……」

「うん、今すぐは無理だよ」

そんな、魔法が使えない……？

実在して、資質もあるのに……？

魔法と言えば3大夢の1つじゃん。

後の2つは気を使うことと、それができなければせめて自由に空が飛びたい。もしくは宇宙に行って無重力を味わうことでもいい。

「……OK、わかった。いつか使えるようになる」

絶対にあきらめない。

「それじゃあ、こっちからも聞きたいことがあるんだけど……ッ！？」

不意に訪れる気配。これはまさか……。

『ユーノ君！』

なのはからの念話。

「新しいジュエルシードが発動している。すぐ近くだ！」

またウネウネか！？

「話はまた後でだな」

「うん、一緒に向かおう。なのはも手伝って！」

たどり着いたのは近所の神社。
今回はウネウネじゃなくてやたらとトゲトゲした……四足歩行の獣の姿をしている。

「原生生物を取り込んでる。実体がある分手ごわいよ！」

そうなの？　切っても切れない相手よりはこっちの方が戦いやすそうなんだけど。

「大丈夫、多分」

なのはには自信があるようだ。どっからきた自信なのかは知らないけど……。

「なのはレイジングハートの起動を！」

「へ、起動ってなんだっけ？」

……本当にどこからきた自信なのか。この魔法少女は……。

「足止めするからその間に早く！」

そう言ってなのはの前に出る。昨日出来たし、今日も午前中に試

しておいて良かった。

「変身能力（トランス）【シールド】！」

自分の手が別のものに変わっていく感覚にはまだ慣れないが、失敗することもなく円形の無骨な盾が形づくられる。

化け物と対峙する恐怖で早鐘を打つ心臓をなだめながら思考は別のところへ向いていた。

今更気づいたんだけど……。

なのはってもしかして、魔法少女リリカルなのは？　ここはその世界なのか……？

今更気づいた事実（後書き）

気づくの遅すぎって言うかタイミングを逃しました。

魔法技術習得に関しては捏造。

魔力の扱いは普通は外部からのアシストを受けながら徐々に慣れていくのではないかと思います。特に最初は。

なので、デバイスを使うかちゃんとした指導者に見てもらう事を条件としました。まだ魔法は使えません。

なんだかH×Hの念の修行を思い出します。

するべきこと／したいこと（前書き）

ちょっと……いや、かなりグダグダになりました。
ちょっと変な形で区切ることになりました。

するべきこと／したいこと

化け物との戦いは割とあっさり終わった。
なのはが忘れたらしい起動パスワードとやらは使わずレイジングハートを起動してのけ、そのままジュエルシードを封印してしまったからだ。
その間、俺はなのはと化け物の間に入って壁になることしか出来なかった。
化け物に力で負けなかっただけでも健闘した方だったと言える。しかし、獣に特性を生かした高機動力の前にはなすすべも無かった。
それに加え、なのはなりの覚悟を持っているみたいだ。それは時折見せる頑固な一面の表れでもあった。

「それで聞きたいことというか、聞かないといけないことがあるんだけど……」
唐突にユーノはそう切り出した。
「イブキは一体……？」
やはりそう来るか……。一体どう説明したものか。
「ユーノ君。イブキ君は記憶喪失だから家にいるんの。だから……」
上手い言い訳も浮かばなかったとき、なのはによる無意識の助け

舟が来た。

「あー……。そうなんだ、実は何も覚えてなくてさ。どうしてこんな力があるのかも……」

「そうか、じゃああれはレアスキル？　……もしかしたら君はこの世界の人間じゃないのかもしれないね」

ユーノは本当に頭がいい。こっちが思いつかなかった理由を勝手に推測してくれている。よくわからないが適当に合わせておこう。

「えっと、なのはは怖くない？　どうやら普通の人間っぽくないみたいだけど」

「そんな、怖くなんてないよ。だってイブキ君は私を守ってくれてるもん」

確かに今のところなのはに見せた変身（トランス）は盾だけだからこの力の本質をまだ知らない。多分だがやろうと思って出来ない変身（トランス）はないだろう。イメージさえできれば……。

まあ、今はまだそれでいいんだろう。力の使い方を間違えないように気をつければなんとかなるだろう。

とりあえず俺自身のことは置いておく。記憶喪失設定のおかげで説明もできないので仕方ないのだ。

それよりも今大事なのはこの世界の事だ。

――この世界は『魔法少女リリカルなのは』の世界である。

ずっと主人公のすぐ側にいたのに全く気付かなかった、と言うのも俺はあまり詳しくなのだ。

精々何人かのキャラの見た目を知っている程度である。内容なんてタイトルから推測できる位のこと以上は知らない。

情報のアドバンテージは無い。

しかし、それがなんだと言うのだろうか？

確かに今まで俺はこの世界が何の世界なのか気になって仕方がなかった。それが分かれば自分が何をすればよいのかわかると思ったからだ。

今思えば馬鹿らしい。本来そんなものがある方がおかしいのだ。

自分がすることは自分で決める。そうあるべきだ。

俺がするべきこと。いや、俺がしたいことはなのはを守る事だ。

余りにも危なっかしくて放って置けないしな……。

するべきこと／したいこと（後書き）

便利だねレアスキル。

次回、ちょっと本編に関係ない話（？）を挟んでから話を加速させます。

原作部分を大幅カットしたりしてテンポアップを図ります。

自分の意思で（前書き）

今回は謎な内容になっています。飛ばしてもいいくらい。
実際、後半の『結局～』だけでも良かったのではないかと思います。

自分の意思で

転生物のお話は大きく2つに分かれる。
原作をブレイクするかしないかだ。

そもそも俺は『魔法少女リリカルなのは』のストーリーなんて知らないので原作もなにもあったものでは無い。
しかし、ブレイクしない方法はある。元々完成された物語に手を加えなければいいのだ。今までのジュエルシードの話であっても俺はあまり役立っていない。今ならまだ間に合うだろう。
もしかしたら運命というものがあって、俺がいてもいなくても何も変わらないのかもしれない。
逆に俺という存在が在るだけで変わってしまうと言う可能性もある。いわゆるバタフライ効果というやつだ。

つまりは考えても詮無きこと。

突然のように話が変わるが、転生はタイムスリップによく似ている。俺には無いが転生者はその世界の未来の記憶を持っている。そして記憶を持って過去の時点へ転生を果たす。

時にあなたはタイムスリップはできると思うだろうか？　俺はできないと思っている。
俺は昔読んだ『傾〇語』と言う本の理論を信じている。
確かに（それに見合うエネルギーさえ用意できれば）似たような事はできる。
しかしそれはタイムスリップではなく平行世界移動で、過去（っぽい平行世界）に行っても現在（自分たちのいる世界）は変えられ

ない。変えることができるのは移動した平行世界の未来でしかないのだ。

専門家ではないので上手に説明できた自信はないが、要するに過去を変える事はできないということ。変えることができるのはまだ決定していない未来だけだ。

これらの原則にしたがって言えば転生は原作の世界には行くことはできない。原作の平行世界ということになる。物語の基盤はあっても未来は決定していない。

原作はあっても原作そのままであることはありえないのだ。

結局のところ何が言いたいのかというと、俺は俺のしたいように好き勝手やればいいのではないかと言うことだ。

もちろん悪いことを好き勝手と言う意味ではない。そんな事はは欠片も思っていない。

そもそも今の俺は死んだ後のラッキーチャンス。しかも豪華なおまけ付き。その舞台はトンデモ魔法バトルの世界。

元々原作の知識もないのだから、自分の意思で自分のやることを決めればいいと思うんだ。

自分の意思で（後書き）

次回からは加速していく予定です。
本来原作には無かったシーンに力を入れていきたいですね。

残る傷跡（前書き）

一気に3話分。

残る傷跡

夜の学校。
そこはそこそこの広さがあるのに対して殆んど明かりがない。なのに……こんなにワクワクするのはどうしてだろう？
なぜこんなところにいるのかと言うと……。
「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル２０。封印！」
――魔法少女と共に戦っていた。

「なのは大丈夫？」
ユーノの声は心配そうで、実際なのはの様子からすればその気持ちはよくわかる。
「だ、大丈夫なんだけど……。ちょっと疲れた……ふみゅう」
「おっと……」
言葉とは裏腹にその場に崩れ落ちそうになったなのはを支える。よほど疲れているようだ。
俺もなのはに付き合ってジュエルシード集めをしていて疲れは感じているが生体兵器は伊達ではなく、体力も人一倍あるので平気だ。

「なのは大丈夫!?」

「落ち着けユーノ、疲れてるだけだって。大丈夫ではなさそうだけど……」

なのはは本当に疲れているようでぐったりしてほぼ寝かけている。額に手を当ててみたが熱もなく、病気だったりはしないだろう。

「仕方ないな……」

そうつぶやいてなのはを背負う。少しでも疲れが取れるように今は眠らせてやろう。

実質、ジュエルシードの封印はなのは任せで俺にできることは少ないのが現状である。

休日。

と言っても学校に行っていない俺には特別な事は何もない。

ただ、今日は士郎さんがコーチ兼オーナーをするサッカーチームが試合をしているらしい。俺も誘われはしたが遠慮しておいた。

士郎さんがいない分を埋めるとは言えないが翠屋のお手伝い。

するとそこに士郎さんが小学生達(おそらくサッカーチームのメンバー)を連れて戻ってきた。もう昼の時間か。

この大人数にご馳走するとはなんと素晴らしいコーチなんだろうか。賑わう店内でウエイトレスをする身にもなって欲しい。

「イブキ君もご苦労さま。最後にこれをなのはのいるところに持って行ってね。外にいるから」

最後？　そう思いながら４人分のケーキと飲み物を持って外に出る。

「あ、イブキ君こっちこっちー」

なのはの呼ぶ声の方を見れば見知らぬ２人の少女と一緒にいた。

「お待たせしまし……、なにか？」

テーブルに近づくと少女の１人がこっちをじっと睨んでいた。

「あんたがイブキ？」

そうだけど何か文句でもあるのか？　思わずそう答えそうになって堪える。相手はお客様だ。

「ほらほら、イブキ君も座って」

なのはは空いた席、と言うか開けていた席を指しながら言った。取り敢えずスルーしておく。こっちを執拗に睨んで来る少女の隣になんて座りたくない。

「……ご注文を確認します。ケーキ４つに飲み物――」

そうやって伝票を見てようやく気づいた。また桃子さんに嵌められたのか。ここにいるのは３人。俺が運んできたのは４人分。

「以上です」

「まだ、イブキ君が座ってませーん」

伝票にボールペンで書かれたイブキ君1人の文字。何人もいてたまるか。

つまりはそういうことだ。最後にって言われた訳だし休憩時間と言うことだろう。しかし、この輪の中に入れと言うのですか？

どうせ何を言っても聞き入れることのない頑固な遺伝子を持つ家族なので、諦めて座りました。

「改めて紹介するね。こちら家に居候してるイブキ君」

「どーも、イブキです」

改めてということは予め紹介されていたということで、特に言うこともない自己紹介。

「それでこっちが……」

「月村すずかです」

「アリサ・バニングスよ」

優しげな表情を浮かべる月村すずかと対照的に先程から先程から痛いほど鋭い視線を浴びせてくるアリサ・バニングス。

「ねぇ、なのは。話が違うんだけど」

「え、何？　アリサちゃん」

「だって、どっからどう見ても女の子じゃない」

「失敬な。歴とした男だぞ」

「そんな格好した男が何処にいんのよ」

確かに俺の言う言葉に説得力はないかもしれない。長い黒髪に可愛らしい顔。翠屋ウエイトレス制服ｖｅｒ．４は女の子仕様でもちろんスカートだ。

他にどのようなｖｅｒ．があったのかは想像に任せる。

「これでも男なんだよ……」

ちょっと自信が無くなってきた。この格好に抵抗が無くなってきてる時点でもうオカマに近いのかもしれない。

「お姉ちゃんは『男の娘』なんだって言ってたよ？」

なのはさん、それは会話では成立しないネタです。

ちょっと時間はかかったが何とか納得してもらった。（アリサの疑いは完全には晴れていないようだが）

それ事以外を除けば相性はいい方のようで直ぐに打ち解けること

ができた。お互いに名前で呼び合う程度の仲と言っていい。
最初の印象こそ微妙ではあったが、アリサの性格は大変好ましい。きっと悪友を経由して親友にまで至れそうなタイプだ。

その後、ユーノを弄り倒してから解散となった。2人にはそれぞれ予定があるらしい。
士郎さんも一度家に帰るらしく、俺やなのはも帰ることにした。
なのははここの所、頑張りすぎで疲れているようだしししっかり休んで置いて貰いたい。

しかし、普段探し回っている時にはなかなか見つからないのに、時と場合と空気を読まず、ジュエルシードは発動するのだった。

ビルの屋上。
ろくに事情も聞かずになのはやユーノの後を追ってきたがその景色を見て絶句した。
もうなんて言えばいいのか……。世界樹の如き巨大な木が街のど真ん中に立っていた。しかも太い幹や根が町中に広がっていて、パニックを引き起こっていた。
「おいおい、こんなのどうしろってんだ」
襲って来たりはしないようなので普段のように盾になる必要もない。

「多分人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持った者が願いを持って発動させたとき、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから……」

既に変身しているなのはの肩の上でユーノが言う。持ち主の願いを叶えるアイテム。確かにそんな物があってしまえば、文明が１つ滅んだとしてもおかしくは無い。

「……」

なのはも少し様子が変だ。落ち込んでいるのか……、なにかを後悔しているような表情をしている。

「なのは？」

「ユーノ君。こうゆうときはどうしたらいいの」

「ああ、うん。封印するには接近しないと駄目だ。まずは元となってる部分を見つけないと……。でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうとどうやって探していいか……」

「元を見つければいいんだね？」

『Ａｒｅａ　Ｓｅａｒｃｈ』

レイジングハートの声と共に振り抜かれた杖。その動きに合わせてなのはの周辺に魔法陣が広がる。

「リリカルマジカル　探して、災厄の根源を」

言葉と共に桃色の光が周囲に放たれ拡散していく。魔法秘匿とか気にしなきゃいけないんじゃないのかな……？

「見つけた！　すぐ封印するから」

「ここからじゃ無理だよ、近くにいかなきゃ！」

「できるよ！　大丈夫！　そうだよね、レイジングハート」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ．　Ｓｅｔ　ｕｐ』

なのはの思いに答え、杖が変形する。すごい、かっこいいぞレイジングハート！

「行って、捕まえて！！」

レイジングハートの周囲に円形状の魔法陣っぽいものが浮かび上がり、杖の先端に光が集まる。あれが魔力と言うやつなのだろう。

そして放たれる桃色の光線。

何度か見たなのはの魔法の中でも一番規模が大きい。何となく力の流れのような物を感じる気がしないでもない。

「リリカルマジカル　ジュエルシードシリアル１０　封印！！」

って更に威力が上がるのかよ！　今までのは照準か何かなのか！？

一気に5倍近く膨れ上がった光線は今までにないくらいのエネルギーが迸っている。本当に封印魔法なのか！？

「ありがとう、レイジングハート」

『Ｇｏｏｄ　Ｂｙｅ』

街に広がっていた大樹は跡形もなく消え去り、その傷跡だけが残っている。

「いろんな人に迷惑かけちゃったね」

「え……。何言ってんだ、なのははちゃんとやってくれてるよ」

「私気づいてたんだ、あの子が持ってる事。でも、気のせいだって思っちゃって」

「なのは。お願い、悲しい顔しないで。元々は僕が原因で、なのははそれを手伝ってくれてるだけなんだから」

ユーノの言いたいことは分からないでもない。けど、言ってることは間違っている。

もう、ユーノだけの問題ではなくなっているのだ。

「なのははちゃんとやってくれてる」

「うん……」

なのはは落ち込んだまま。俺はなんと声をかけていいのかわからないまま、その日は帰路についた。

街に残った傷跡は痛々しく、なのはほどでは無いにしろ俺も無力

感に包まれていた。
早いうちに変身能力（トランス）を使いこなせるようになる必要があった。

残る傷跡（後書き）

感想が欲しいです。こうモチベージョン的に。

直接的に言うのもどうかと思うんですが本当に来ないので敢えて言って見ました。もう言いません。多分。

猫天国（前書き）

やっぱりモチベーションが上がらずにグダグダする。
もうちょっと先まで書く予定だったのですが……。

猫天国

なのははここしばらく元気がない。
1週間前、ジュエルシードで街に大きな被害が出た時からのようだ。
しかし、それを表面に出さずになのはは終始明るい様子を見せている。

俺としてもどう接するべきか悩む休日。
俺、なのは、恭也さんの3人は月村家に来ていた。

家。
そう呼ぶには大きすぎるので豪邸と呼ぶべきか。
敷地は一見しただけでは分からない程広く、そこに建つ建物も大きいだけじゃなく豪華だ。
なんと見目麗しいメイドさん（ノエルさんファリンさんの2人）まで存在するのだから驚きだ。
ついでに至るところで猫を見かけることができる。猫好きにはたまらないだろうな。

ここに来た理由はお茶会。
この前はあまり時間も取れなかったから改めて交流を深めたいと、俺も来るように言われたのだ。
それとなのはが最近元気がなかったことも理由にあったらしい。
元気に振舞っているのに気づけるのは2人がそれだけなのはと仲が良い証拠だろう。少なくとも俺よりは付き合いは長い。

ついで、と言うのもどうかと思うが、恭也さんはすずかの姉、月村忍さんと恋人関係らしく、なのはの付き添いと言う名目で会いに来たようだ。

ユーノが猫に追いかけられたり、ファリンさんがティーセット持ったまま転びそうになったり、猫と戯れたり、美味しいお茶とお菓子を頂いたり……。騒がしいけど平穏な日常風景だった。

少なくとも今日一日は何も起きずに過ごせて、少しでもなのはに元気が戻ればいい。

しかし、そんなささやかな願いすら叶うことはなかった。

――ッ！！

これまでにも何度か感じた感覚。ジュエルシードが近くにあるらしい。

なんとかしてこのお茶会から抜け出さなければいけない。

「ユーノ君？」

突然ユーノがなのはの膝の上から飛び降りて茂みの方へ走り出した。

「あらら。ユーノどうかしたの？」

「うん、なにか見つけたのかも。ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「ううん、大丈夫。すぐ戻ってくるから待っててね」

成程、いい作戦だな。後はどうやって追いかけるかだな。走っていくなのはを目で追いながら考える。

「本当に大丈夫かしら？」

まだ心配しているアリサ。このままではやっぱり追いかけるとか言い出しかねないぞ……。

「仕方ない、俺も行くか」

「あ、ならあたしも行くわよ」

「え、アリサが行くなら俺は行かないぞ。アリサが居ないうちにクッキー食べるから」

「なっ。あんたね～！！」

「冗談だよ。俺1人で十分だ」

これだけ軽口叩いておけば大丈夫だろう。多分。

クッキー残しとけよ、と言い残して俺も茂みへ入っていった。

まず何の冗談かと目を疑った。
とても大きな小猫。子猫をそのまま大きくしたようで高さだけでも3メートルはありそうだ。
追いついたなのは達も唖然とした顔をしていた。

「このままじゃ危険だから元に戻さないと」

「そうだね、流石にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし」

そう言う問題じゃないだろ。むしろあのサイズにまでなった子猫が悠々と歩ける庭があるんだからもしかしたら……。とか思っちゃいそうだ。

「襲ってくる様子は無さそうだし、ささっと封印しちゃおう。……レイジングハート！」

もうなのはも慣れた様子でセットアップを行おうとして、行えなかった。

突然、黄色い閃光が子猫を襲ったからだ。

猫天国（後書き）

ちょっとばかし駆け足気味に一期を終わらせたいと思っています。
大丈夫ですかね？

魔導士（見習い）ＶＳ魔導士（前書き）

なかなかうまく書けない事に悩みつつ投稿。
アイデアだけじゃどうしようもないッスね。

魔導士（見習い）ＶＳ魔導士

大きな子猫を攻撃した人物は俺たちの後方にいた。振り返った俺たちが見たのは金髪ツインテールの黒いマントの女の子。

なのはと同い年くらいの女の子が空に浮いている！

よく見ればその手にはレイジングハートとは異なる外見をしている、しかし紛れもない魔法（デバイス）の杖。

もう１人の魔法使い。

もう１人の魔法少女。

『Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

改めてレイジングハートをセットアップしたなのはは小猫を障壁で庇う。

「魔導士……」

しかし、大きくなった子猫の体全体をカバーできず、猫の足元を狙う魔法を止めることができなかった。

「同型の魔導士。ロストロギアの探索者……」

空中から付近の気の枝に降り立った少女が呟いた。

「間違いない、僕と同じ世界の住人。そしてジュエルシードの正体を……」

ユーノの言うここではない世界、確かミッドチルダだったか。そこの住人でジュエルシードを、願いを叶える石を探しているのか？

「バルディッシュ。ロストロギア、ジェルシードを」

『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ　Ｓｅｔｕｐ』

バルディッシュと呼ばれたデバイスの先が展開し光の刃が生まれた。【鎌（サイス）】か。

「申し訳ないけど頂いていきます」

そう言った少女は空を駆けるようになのはへと迫る。有無を言わさず実力行使と言う訳か……。

『Ｅｖａｓｉｏｎ．　Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ』

なのはの靴から光の羽が開き、空中へと身を躍らせる。その顔には困惑の色が強い。いきなり攻撃されたのだから無理もない。

……余りにも当たり前のように空を飛んでいるので突っ込み損ねていしまったが、敢えて言うなら……。

羨ましい！！（突っ込みではない）

「おい」

なんと話しかけていいのかは分からなかったが、つい声をかけて

しまう。しかし、こちらのことは一瞥するだけで気にも止めなかった。

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』

振り抜かれたサイスの先から回転する魔力刃が飛ぶ。
それをなのはは防御したが、着弾時に魔力が光り、なのははその光の中に巻き込まれた。

「なのは！！」

ユーノの声に応じたかのように光の上端から姿を表すなのは。しかしその動きは読まれていて、一気に距離を詰めた魔導士がサイスで切りかかる。なのはと魔導士のデバイスが激しくぶつかり合う。

鍔迫り合いの状況からお互いに距離を取り直す。再びなのはは子猫の前へ、魔導士は木の枝へ。
なのははレイジングハートをシューティングモードへ、魔導士はサイスを元の状態に戻した。お互いに遠距離攻撃の構え。

初めての事態だというのにそれに適応して見せているなのはもすごいが、それ以上にあの少女は戦い慣れているように見える。
俺自身戦いなんて経験したこと無いのだから少女がその年齢でどういう境遇に置かれているのかが気になる。

「ニャァ……」

今まで地に伏していた子猫が身動ぎをしてなのはは一瞬気を取られた。
そして出来た隙に少女が一言つぶやき魔法を放つ。

「だから無視すんなって！」

考える前に体は動いていた。そうでもなければ間に合わなかっただろう。

「【大盾（ラージ・シールド）】！！」

名の通り大きな盾だ。ここ1週間の成果と言ってもいい。しかし魔法の黄色い閃光の威力は想像以上だった。

なにより直接なのはではなく若干下、地面に向けて撃たれていたため、盾では防ぎきれない。

巻き起こった爆発に俺となのはの体は宙を舞った。相当な高さまで飛ばされていて上下左右の感覚まで曖昧に感じる。

空中で錐揉みしながら何とかなのはの服を掴み、引き寄せる。気を失っているなのはの頭を守るように抱え込みながらボンヤリとした思考を巡らせる。

小さな傷ならすぐ治ったけど大きな傷はやっぱりキツイかな？

むしろこの高さから落ちたら即死もありそうだ。大概の怪我は治りそうでも即死は無理だよな……。

魔導士（見習い）ＶＳ魔導士（後書き）

中途半端に切ってしまうのは見通しの甘さが原因。
もう少し計画性という言葉を覚えたい今日この頃。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3464w/

白い悪魔の使い魔？

2011年10月8日02時34分発行